

「現代中国とアジア世界の人口生態環境問題」研究会総括報告  
環境問題に必要な倫理

榎根 勇

資本主義は、自己循環論法で成立する貨幣を媒介として、システム間の差異から利潤を生み出す、普遍性のあるシステムである。それゆえグローバル化したのであり、当分これに代わりうるシステムは出現しない。しかし資本主義は、自己循環論以外には根拠をもたないという点で、本来的に不安定なシステムであり、ハイパーインフレーションの発生という危険性を内包している。資本主義は倫理性を絶対必要とする（岩井, 2006）。

一方、環境問題は、「自然の価値」を無視した産業資本主義経済活動の結果として必然的に発生したものである。環境問題の改善にも倫理性が絶対必要である。

環境問題に関する倫理性は、企業（法人）側にも市民側にも要請されるが、企業側の倫理性は基本的には法として規定することができる。市民側の倫理性には、法(国家)や貨幣(資本主義)の不完全性を補完できる何かが必要である。その候補としては、成熟した社会にふさわしい倫理、たとえば「思いやり」や「やさしさ」などが考えられる。

「思いやり」や「やさしさ」という配慮は、人間に対してだけでなく、資本主義社会で無視されてきた「自然の価値」に対してもなされなければならない。「自然が壊れれば、人間も壊れる」という常識が、そのような配慮を要請している。

この「自然が壊れれば、人間も壊れる」という常識は、最新の科学によって、「人間の心が脳と環境との相互作用でつくられるから」という裏づけをえた。社会的な人間の心は、社会の中でつくられる。そして、自然は心をつくる部品の一つである。

「地球にやさしい」という表現は、いかにも曖昧である。「やさしさ」を判定する第三者がないのだから、何が「やさしい」のかの判定はできないという批判もある。しかし、中国でも「環境友好型社会」という言葉が使われている。

この「曖昧だ」という批判に対しては、「思いやり」や「やさしさ」は「社会が成熟するにつれて変化する概念だ」という答えがありうる。だれもが必要だと考えるようになり、曖昧ではなくなった「思いやり」や「やさしさ」は、法として制度化すればいい。あとに残された曖昧な何かこそが、「思いやり」や「やさしさ」の本質である。環境問題に歴史性と地域性があるように、「思いやり」や「やさしさ」にも歴史性と地域性があり、「曖昧さ」のもとにはそこにある。「思いやり」や「やさしさ」の内容を、普遍性のあるものとして画一的に規定することはできない。万物は生成・進化する。

岩井克人は三浦雅士との対話形式でまとめた著書の中で（岩井, 2006）、貨幣も法も国家も自己循環論法で支えられていること、つまりデ・ファクト・スタンダード（de facto

standard)であることを論理的に明らかにしてくれたが、残念なことに岩井は、この本では「自然」にも「環境」にもまったく言及していない。上に短くまとめた文章は、この岩井の著書に触発されて、それを私なりの環境論へと発展させたものである。

ところで佐伯啓思(2005)は、「制御なき市場中心主義に歯止めをかけうるもの。リベラリズム・個人主義にもっとも欠けているもの。それは、<倫理への問いかけ>である」(彼の本の帯の文章)と主張する著書の中で、「市場・国家・社会共同体・潜在的価値体系」の四項からなる社会システムを提示している。これは、岩井の、「資本主義・国家・市民社会」という三角形モデルとよく似ている。ただし、「市民社会」＝「社会共同体・潜在的価値体系」であるとは必ずしも限らないから、両者の差異はそこにあることになる。

岩井は、「資本主義に対して、コミュニタリアニズムには勝ち目がない」と考えている。だからこそ、佐伯は、「社会共同体」のほかに「潜在的価値体系」を追加したのかもしれない。佐伯の言う「潜在的価値体系」の中心にあるものは、規範であり倫理である。佐伯は、「競争的な市場に対してある規律を与えるものがあるとすれば、それは、それぞれの社会に埋め込まれている規範や倫理の感覚と言うほかなかろう」と考える。両者の考えは同じではない。

しかし、行く手に明かりが見えてきたようにも感じる。両者とも、当分、資本主義に代わりうるシステムは現れないと考えている。すでに東欧の社会主義は崩壊したし、中国も産業資本主義を選択した。資本主義と環境問題には、いずれも倫理性が不可欠であるという共通点がある。「環境」の視点から考えると、資本主義を選択した中国にとって残された課題は、共産党中央がスローガンに掲げている「社会主義的市場経済」という言葉に含まれる「社会主義的」という形容詞を、「市場経済」から分離して、岩井のいう「市民社会」か、佐伯のいう「社会共同体・潜在的価値体系」に相当する、倫理性のあるものへと発展させることができるか否かにあるように思われる。このような視点は、「市場経済」にとっても同様に必要である。

佐伯の示唆する方向へ向かうとすれば、「潜在的価値体系」の候補と考えられるのは「老荘思想」や「儒教思想」であろうが、後者のほうがより規範性が強く、その点で環境倫理には向いていないかもしれない。岩井の「市民社会」の実体は必ずしも明確ではないが、この方向は、私がこれまで主張してきた「新しい知」による「次なる社会システム」の構築という方向と同じであるように、私には思われる。

私は『麗江古城の環境論』(榎根, 2006)の中で、「新しい知」の一つのモデルとして、ケン・ウィルバー(2002)の「万物の理論」の枠組みを採用して、麗江古城の「環境」について考えてみた。ただし「環境」についての私の考えは、ウィルバーのそれとは明確に異なる。ウィルバーは、万物は、「それ・それら・私・私たち」という四象限空間の中に織り

込まれているとし、「自然」と「環境」を「それら（右下）象限）」の中に閉じ込めているが、私はそのようには考えず、「自然」と「環境」は万物と関係している、すなわち四象限のすべてに関係しているという立場をとる。「自然」や「環境」をウィルバーのように狭く捉え、それらを人間と対置して、客観的に理解しようとしたところに、近代という思想の限界があったのではないか。「物質・生命・心を含む宇宙と人間のホラーキー構造を、あらゆる思想・哲学・宗教を含んで統合的に明らかにし、我々のいる位置と進むべき未来を鮮やかに指し示した」（彼の本の帯の文章）とされるウィルバーですら、この限界から抜け出すことができなかった。これは、欧米キリスト教社会から生まれた、近代という思想の強固さの表れでもある。

この『万物の理論』を私なりに咀嚼して、ナシ族の誇りである麗江古城の、自然の一部である「水」に適用してみた結果、年間400万人を超えるといわれる多くの観光客がわずか3.8km<sup>2</sup>の広さしかない麗江古城に惹きつけられるのは、麗江古城における「水」の調和性にあるという結論に到達した。それをウィルバーの四象限空間上で、具体的に言葉で表現すれば、「それ象限」の水循環、「それら象限」の水利用システム、「私象限」のナシ族の水信仰、そして「私たち象限」のナシ族の水文化となる。すなわち、麗江ではこれら四者の調和がうまく保たれている。

つまり、麗江古城は、私が考える「次なる社会システム」の一つのモデルでもある。私は、「スバック」という独特の水利用システムに支えられたバリ島の稲作社会を調査したときも、同じ結論に到達し、この社会は一つのポストモダン社会であると考えたが（樞根, 2002）、麗江古城についても同じことを言いたい。

岩井は、貨幣や基軸通貨を媒介として成立する資本主義の本質がデ・ファクト・スタンダードであることを見抜き、近代⇒ポストモダンという歴史的発展観を疑っている。すなわち岩井は、ポストモダンの出現は、このような時間的経過を必ずしも必要とせず、貨幣のなかにすでにポストモダン性をみている。麗江古城の水社会やバリ島の稲作社会にポストモダン性をみた私の考えは、岩井のポストモダン解釈に近いかもしれない。中国はすでに、自国内に、麗江古城という「次なる社会システム」のモデルをもっている。

今後のさらなる検討を必要とするが、「新しい知」についても、同じことが言えるかもしれない。たとえば、「老荘思想」が中国流のポストモダン思想である可能性を否定することは、現段階ではできない。

#### 文献

岩井克人 (2006) : 資本主義から市民主義へ、新書館、277p.

ウィルバー, K. (2002) : 万物の理論 — ビジネス・政治・科学からスピリチュアリティまで —、トランスビュー、317p.

---

梶根 勇 (2002) : 水と女神の風土、古今書院、335p.

梶根 勇 (2006) : 麗江古城の環境論、愛知大学 COE-ICCS (印刷中) .

佐伯啓思 (2005) : 倫理としてのナショナリズム — グローバリズムの虚無を超えて — 、NTT 出版、285p.